

## 国際音声字母の初期の歴史

林, 哲郎  
九州大学教養部 : 助教授

<https://doi.org/10.15017/6796105>

---

出版情報 : 言語科学. 3, pp.6-14, 1967-03. 九州大学教養部言語研究会  
バージョン :  
権利関係 :



# 国際音声字母の初期の歴史

林 哲 郎

- I. は じ め に
- II. 視話法（ベル）と器官的記号（スイート）
- III. 非字母記号（イエスベルセン）
- IV. ベーリオタイプ記号（エリス）
- V. グロシック文字（エリス）
- VI. ローミック記号（スイート）

## I

国際音声学協会（International Phonetic Association）は1886年に創設された。この最初の名称は音声教師協会（The Phonetic Teachers' Association）といった。この協会は、フランスの言語教授にたずさわる少数のひとたちで構成されていた。かれらは音声理論と音声表記とが実際の言語教授において有益であることをみとめて、これをひろく普及することをもくろんでいたのである。

あらゆる言語に適用されるような音声字母（phonetic alphabet）を制定しようとする着想は、1886年に、イエスベルセン（Otto Jespersen）がパシー（Paul Passy）にあてた書簡のなかで表明された。このかんがえは、音声学協会のほかの会員たちにより熱意をもってとりあげられた。そして、2年以上にわたる協議の結果、国際音声字母（International Phonetic Alphabet）の最初の草案がつくりあげられたのである。われわれは、この草案に到達する以前の、音声記号の制定と改良の歴史をたどってみることにする。

さて、欧州における近代的言語研究は、19世紀後半にいたって、はじめて科学的と称することのできる段階にまで達したといえるであろう。それは、従来の文献学的ないしは哲学的観点にかかわって、むしろ生理的・物理的観点から、言語の音声面を考察する真に分析的・記述の方法が確立されたからである。このような言語音の科学研究は、ベル・イエスベルセン・エリス・スイートらによって、その確固たる基盤がすえられたのである。

## II

言語の音声を、単に記録と伝達をめあてとした慣用綴字としてでなく、これを科学的操作にたえるように客観的に表記する手段として、これまでいろいろの記号が考案されてきた。それは、つぎの三種に大別することができる。

(i) 言語の音の単位を、従来のローマ文字にたよらないで、まったく新しい記号をつくって、象徴的にあらわし、これを字母的にもちいるもの。

(ii) 音の単位である単音または音素をくわしくあらわすために、非字母記号によって、音声器官のはたらきを分析してしめすもの。

(iii) 主として従来のローマ文字によって、単音または音素をあらわし、これを字母的にもちいるもの。

まず、(i)の新しい記号をもちいる例は、ベルの「視話法」(Alexander Melville Bill, *Visible Speech*, 1867)の表記法に見られる。この視話法文字はローマ文字とは関係がなく、まったく独創的なものである。これは、音声の精密な分析にもとづいて、それぞれの音とこれをあらわす記号とが有機的関係をもつように考案された。つまり、個々の単音を、その調音の位置や様式により全体として象徴的にあらわし、その文字は実際の音の発出を可能ならしめるようにくふうされている。たとえば、子音をしめす記号はすべて、CもしくはWの丸みをおびた形体をしている。これをいろいろに変形して、全体の記号が有機的に関連性をたもつのである。一方、母音をしめす記号は、IもしくはJに似た形体であって、これに(一)を交叉させたり、上端や下端をのばしたり、まげたりして、母音記号のすべてが図形上関係を有しているのである。このような視話法文字(visible speech letter)は、これらを字母的に並列させて、ながい文章の音声表記にもちいることができる。また、単音をあらわすだけでなく、わたり・強さ・高さ・ながさをしめす記号もふくまれている。

スイートは、ベルのこの視話法文字を改良して、それに「器官的記号」(organic notation)の名称をあたえた。これは「音声学入門」(Henry Sweet, *Primer of Phonetics*, 1890)で詳説されている。が、すでにロシア語の発音に関する論文(1877-9)においてこれを使用していた。しかし、1880-1年の論文では、これを「改良器官的字母」と称した。

この表記法によれば、たとえば母音は、「声の記号」であるIをいろいろに変形したものによって、これを統一的にしめす。すなわち、[i]のような狭母音はそのIの上部に、[ɔ]のような開母音はIの下部に、点(「狭」の記号)または鉤(「開」の記号)の加っ

た記号であらわす。さらに、[i]の前母音をしめす記号は、その点が右をむいており、[ɔ]の奥母音をしめす記号は、左をむいている。子音をあらわす記号も、調音様式のおなじものはおなじ形の文字でしめし、また、その形と方向をかえて、調音位置の違いもしめすようにしている。

もちろん、これらの器官的記号は、左から右へならべることによって、ながい発話を字母的にしめすことができた。しかし、この記号は図形が複雑であって、印刷にもまた実際の筆記にも不便であった。そして音声の微細な変異をしめすことができない欠陥があった。ただこの記号は、音声の器官発声的特徴が一見して絵画的にとらえることができるように考案されている。それゆえに、この図式の原理を熟知し、この記号の約束をよく記憶しているものにとっては有益であろう。

### III

イエスベルセンの「非字母記号」(analphabetic notation)は、前述(Ⅱ)の記号の代表的な例である。かれは音声記号をもちいる目的は、つぎの二つであるとしている。

(1) ある言語は一定の音韻組織を有しており、単音の数にも限りがある。この言語の長い文章の表記の場合には、ある記号を、この言語の特定の音をあらわすものとしてもちいても差支えない。このような目的のためには、[現在ひろくおこなわれている]国際音声学協会の記号のような、「字母的」(alphabetic)なもので十分である。複雑な記号は、かえて実用に適しない。

(2) ある言語の一単音、または一単語の音をくわしくあらわすためには、ベルやスイートの音声生理学的記号ですら十分でない。それで、この目的のためには、従来の字母的記号はすべて、音声器官の働きをしめし、限らない音の種類をあらわしうる「非字母的」(analphabetic)な記号を考えるべきである。

このように、イエスベルセンは前記(i)の象徴的な音声生理的記号の欠点とその字母的性質にあると見て、おのおのの単音を分析的にあらわすが、これを字母的にもちいない方法を考案したのである。

イエスベルセンの記号は、単音を発する際の発音器官の特徴や発音様式などを、それぞれの約束によって分析的にしめすのである。たとえば、a-lのあいだのローマ文字は、調音の位置をあらわす記号とする。aは唇の突出、bは唇が普通にたもたれること、cは後へひきつけられることをしめす。α(アルファ)からζ(ゼーター)までのギリシア文字は、調

音器官をあらわす。たとえば、 $\alpha$ は唇、 $\beta$ は舌尖、 $r$ は舌の表面、 $\delta$ は口蓋帆、 $\varepsilon$ は声帯と  
いうように、約束を定める。これらギリシア字母のそばに記るされるアラビア数字1, 2,  
3……は、呼気の通路の大きさをしめす。これらの記号を組みあわせて、それぞれの音の発  
声的特徴を細かに表記するのである。たとえば、 $\delta$  1は弛緩した発音に見られる軽い鼻音化、  
 $\delta$  2は普通の鼻音における口蓋帆の下り方、 $\delta$  3はもっとも垂下した口蓋帆をしめす。3以  
下は数が大きくなるにつれて、それだけ大きい呼気の通路をしめす。

このようにして、イエスベルセンは、従来のローマ字母を字母的にもちいないで、ローマ  
字母とギリシア字母とアラビア数字を記号的に組合わせる方法によって、言語音の表記法を  
考えだした。この方法は、調音器官のすべての動きを細大もらず記録することができる利  
点を有している。そして従来のいかなる字母の記号よりも、より高度の精密さで音を表記す  
ることができるのである。イエスベルセンの意図は、字母的でない用法にもとづいて、長文  
よりもむしろ、単音もしくは単語の音を、可能なかぎり精密正確に記録する点にあったとい  
えよう。

#### IV

従来のローマ文字を主としてもちいる(Ⅲ)に属する記号として、国際音声記号もしくは  
国際音声字母がもっともよい例である。この音声字母は現在も有力で、ひろく普及している  
ことは周知のとおりである。以下その成立の由来を考察してみることにする。この国際音声  
字母の起源は、イギリスの音声学者エリスの「グロシック文字」(Glossic character)と  
「ペーリオタイプ文字」(Palaeotypic letter), スイートの「ローミック記号」(Romic  
notation)にさかのぼる。

エリスはその大著「初期英語の発音に関して」(Alexander J. Ellis, *On Early English  
Pronunciation*, Part I, 1869)の巻頭で、この書でもちいられる科学的な音声記号を考案  
して、つぎのように説明した。ここに「ペーリオタイプ」というのは、「普通の印刷用活字  
による、すべての話しことばの音声の体系的な表記法」である。つまり、多くのひとびとに  
理解されるためには、できるだけ「その本来のラテン語の意味でもちいられるローマ字母の  
文字」(the letters of the Roman Alphabet in their original Latin senses)が、表  
記法体系の中核とならねばならない、という主張であった。それゆえ、エリスは印刷業者に  
も、また音声学者にも便利のように、「旧来の活字」(old types, *palaiot tupo*)をもち  
いた。これは現用の書記法にとってかわるのではなくて、もっぱら科学的使用にあてたため

であった。そして、きわめて精密で、しかも印刷に便利のように、すべての言語のさまざまな音声を表記する意図にもとづいていた。

このような趣旨であるから、エリスはアクセント — たとえば (´, ˘, ˆ) を附した文字ももちいず、倒置させた文字もごくわずかばかりとし、そして字形の一部を削ぎおとした文字もさらに少くもちいるという方針をうちたてた。そしてローマ母音字 (a, e, i, o, u) は「イタリア語のように発音される」 (pronounced as in Italian) という、かれ以後の音声表記法に大きな影響をおよぼした原則を定めたのである。エリスのかがけているローマ母音の、実際の用例をひろい上げれば、つぎのとおりである。

- (a) I. matto, F. chatte.
- (e) G. fett, F. jette.
- (i) F. fini.
- (o) I. o aperto, F. homme
- (u) F. poule

この五つの母音のほか、(y, œ) はドイツ語の (ü, ö) の音をしめすのにもちいる。そして斜体字と小形の大文字は、上記の五母音のある種の変異音をしめすのである。子音表記の試みとして、つぎの例は注意すべきであろう。

- |                       |                         |
|-----------------------|-------------------------|
| (th) = [θ] E. thin    | (dh) = [ð] E. thee      |
| (tsh) = [tʃ] E. chest | (dzh) = [dʒ] E. judging |
| (sh) = [ʃ] E. she     | (zh) = [ʒ] E. vision    |
| (g) = [ŋ] E. singer   |                         |

以上にしめした ( ) のなかの記号は、エリスがかかげた多数の記号のなかのわずかな部分にすぎない。かれは、一見して不必要とおもわれるほどの、綿密で詳細な記号の区分をおこなった。しかしエリスが、とくに表音のための「文字」 (letter) と、表音のための「符号」 (sign) とを区別していることは、卓見といわねばならない。たとえば符号として、bit = (bit´) における語尾の (´) は simple whisper をしめし、little = (litʳ) における (ʳ) のアポストロフィーは simple voice をしめす、としている。しかし、前述の [θ, ʃ, ʒ] の単音にたいして、エリスはそれぞれ (th, sh, zh) の二重字母で

でしめしているのは、一つの欠点である。

エリスは、音声表記に科学的な正確さをもとめた。かれは、この「ペーリオタイプ記号」には、それまでに音声学者が考案した「すべての音声をしめす文字」がふくまれており、「もっとも完全な音声記号」である、と自負している。この記号は微細な音声的差異をもしめしうる長所がある反面に、あまりにも複雑であり、記号の数が多すぎる欠陥があった。このことは、印刷上はとにかくとして、各人の実際における表記という点からはかえって不便であるといわねばならない。しかし、このエリスのうちたてた音声表記の資料と原理はスイートにひきつが、この繁雑な記号群はスイートにより整理統一された。この点で、エリスの音声表記史における先駆的役割は大きな意義をもっていたといえる。

## V

前述の「ペーリオタイプ記号」は学術的な使用に供するために、精密さと正確さとを目ざした表記法であった。これにたいして、エリスの「グロシック文字」(glossic letter)は、英語の伝統的綴字法と併用するための新しい綴字法の体系であった。これは、エリスの「初期英語の発音に関して」の第Ⅲ部(1871)において発表された。かれは「普通綴字」(nomic spelling)が英語のいかなる容認発音とも近密な関係をしめさないことをみて、これが一般のひとの読み書きに支障が多いということを痛感していた。それゆえに、在来の綴字の形態をかえないで、またそれがしめす音価からできるだけ離れないようにして、しかも伝統的な綴字法のいくつかの欠陥をあらためようとするのである。

つぎに、エリスのグロシック文字による長母音・短母音・二重母音・半母音をしめす綴字をかかげる。

|        |      |      |      |      |      |
|--------|------|------|------|------|------|
| BEET   | BAIT | BAA  | CAUL | COAL | COOL |
| KNIT   | NET  | GNAT | NOT  | NUT  | FUOT |
| HEIGHT | FOIL | FOUL | FEUD |      |      |
| YEA    | WAY  | WHEY | HAY  |      |      |

つまり、EEの連母音字は伝統的綴字beetにおいては[ i : ]と発音されるので、EEを[ i : ]音の記号として、一貫して[ i : ]をしめす語にもちいるのである。この表の大きい大文字の連母音字が、グロシック母音文字である。ただ三種の文字のみが普通と綴字とこと

なっている。上記の *fuot* (foot) と *dhen* (then) と *rouzhe* (rouge) における *uo* = [u], *dh* = [ð], *zh* = [ʒ] がそれである。文章の綴りかえの例をつぎにしめそう。

“Ingglisch Glosik (soa Kauld from dhi Greek gloas·sa, tung) Konvai·z  
whotev·er proanunsiaishen iz inten·ded bei dhi reiter.”

このグロシック綴字法は、子音の関するかぎりでは、前述の「ペーリオタイプ記号」のそれにかなり類似している。(p, f, b, v, t, d, s, z, k, g) はおなじである。また *th* [tʃ], *j* [dʒ], *ng* [ŋ] は、ペーリオタイプ記号の (tsh), (dzh), (q) とことなっている。

以上のようなグロシック文字は、英語の伝統的綴字法にしたがっているもので、これを記号としてもちいる場合には、英国人にしか理解されないという欠点がある。しかも、それぞれの音価をしめす上記の表の語の発音そのものが、何年かのうちに変化しないという保証はない。エリスが「ペーリオタイプ記号」を考案したのは、「グロシック文字」に見られるような欠点を、さらに安定性のある「大陸音価」(continental value) の (a, e, i, o, u) 等によって補おうとする意図からであった。しかし、エリスのグロシック文字の子音の一部はスイートのローミック記号に採用された。そしてもう一つの重要な歴史的意義は、大部分のグロシック記号がファウラー兄弟の *The Concise Oxford English Dictionary* (1911) と H.W. ファウラーの *Modern English Usage* (1926) における音声表記に適用されたことにある。

## VI

スイートの「ローミック記号」(Romic notation — Henry Sweet, *A Handbook of Phonetics*, 1877) は、エリスのペーリオタイプ記号を改訂したものである。つぎにこの二種の表記法を比較してみよう。

### Paleotypic (1869)

|    |        |
|----|--------|
| aa | father |
| æ  | man    |
| ee | air    |
| ai | aye    |

### Romic (1877)

|    |        |
|----|--------|
| aa | father |
| æ  | man    |
| ae | hair   |
| ai | fly    |

|     |        |        |             |
|-----|--------|--------|-------------|
| AA  | awed   | ao     | fall        |
| əu  | house  | au     | now         |
| e   | met    | e      | head        |
| eei | they   | ei     | fail        |
| ə   | but    | ə      | bud, better |
| ə   | murmur | əə     | bird        |
| i   | fish   | i      | fill        |
| ii  | eye    | ii, iy | feel        |
| ɔ   | odd    | o      | folly       |
| oi  | boy    | oi     | boy         |
| oou | Know   | ou     | no          |
| u   | pull   | u      | full        |
| uu  | pool   | uu, uw | fool        |

スイートのもちいた記号は、主としてローマン活字体による、ローマ文字のみを使用するもので、「簡略ローミック記号」(Broad Romic notation)と称される。母音価は、エリスのペーリオタイプ記号とおなじように、大陸の音価に依存する原理にしたがっている。この両種の記号を比較してみると、スイートはエリスをわずかに修正していることがわかるであろう。長母音は母音字を重ねるという原則をうけつぎ、二重母音もだいたいおなじである。しかしエリスの(eei, oou)は、スイートでは(ei, ou)に簡略化されている。スイートの(ae)は(e)のさらに開いた音である[ɛ(:)]を、(ao)は(o)のさらに開いた音である[ɔ(:)]をしめそうとした苦心の記号であろう。スイートの(iy)と(uw)は、音声学者としてのかれの鋭い音声観察をおしえるものである。「ローミック記号」がその名称どおり、エリスの「イタリック字体」をさらに改めて、「ローマン字体」に近づけている例は、(i)と(oi)と(u)に見られる。

子音をしめす「ローミック記号」として、つぎのローマ字母はそれぞれ普通の綴字にあらわれる音価をしめす。

(b, d, f, g [g], j [dʒ], k, l, m, n, p, r [r], s, t, v, w, x [ks],  
y [j], z)

そして sh [ʃ] , zh [ʒ] , th [θ] , dh [ð] はエリスの「ペーリオタイプ」と「グロシック」をそのままうけついでいる。これらの単一の音にたいする二個の子音字の使用は、ローミック記号の欠陥の一つとして、国際音声字母では [ ] のなかの音のように単一字母による表記に改められた。一方、change にたいするローミック記号の (c) は、エリスの (tsh) よりの進歩をしめすとともに、スイートがこれを一つの音素的単位として認めていたことを教えてくれる。

以上概観したように、19 世紀後半以後における先駆的音声学者ベル (1867) , エリス (1869 , 1871) , スイート (1877) らによって、音声の科学的分析にもとづく正確な表記法がしだいに確立されてきた。この音声記号の制定の歴史は、音声を発音様式の特徴に応じて絵画的象徴的にしめす方法よりも、従来のローマ文字をもちいながら、しかも科学的正確さをねらって、字母的な表記法を実施しようとする方向を目指していたといえるであろう。スイートの「ローミック記号」がどのような資料を国際音声字母に提供し、どのような記号が新たにつけ加えられたかは、われわれのつぎの機会での考察にゆずることにしよう。

BEGINNINGS OF THE ESTABLISHMENT OF  
THE INTERNATIONAL PHONETIC ALPHABET

Tetsuro Hayashi

The idea of establishing a phonetic alphabet applicable to all languages was first suggested by Otto Jespersen in his letter to Paul Passy in 1886. After enthusiastic discussions and consultations among the members extending over two years, the first version of the International Phonetic Alphabet was drawn up.

This is an essay in which the present writer has tried to trace back a brief history of phonetic signs prior to and around the establishment of the IPA. The earlier phonetic letters and notations to be considered here are as follows: Bell's visible speech letters, Sweet's revised organic notation, Jespersen's analphabetic notation, Ellis's paleotypic letters and glossic characters, and Sweet's Romic notation.